

VERSION JAPONAISE ET COURT THÈME

I. VERSION

暗い晩で風が吹いていました。より江(え)はふと机から頭をもちあげて硝子戸(ガラスど)へ顔をくっつけてみました。暗くて、ざわざわ木がゆれているきりで、何だか淋(さび)しい晩でした。ときどき西の空で白いような稲光(いなびかり)がしています。こんなに暗い晩は、きっとお月様が御病気なのだろうと、より江は兄さんのいる店の間行ってみました。兄さんは帳場の机で宿題の絵を描(か)いていました。

「まだ、おっかさん戻らないの？」

「ああまだだよ。」

「自転車に乗っていったんでしょう？」

「ああ自転車に乗って行ったよ。提灯(ちょうちん)つけて行ったよ。」

より江たちのお母さんは村でたった一人の産婆(さんば)さんでした。より江はつまらなそうに、店先へ出て、店に並べてある箆(ざる)や鍋(なべ)や、馬穴(ばけつ)なぞを、ひいふうみいよおと数えてみました。戸外では、いつか雨が降り出していて、湿った軒燈(けんとう)に霧のような水しぶきがしていました。兄さんは土間へ降りて硝子戸を閉め、カアテンを引きました。より江はさっきから土間の隅にある桶(おけ)ののこを見ていました。

「健(けん)ちゃん！ 蛙(かえる)がいるよ。」

「蛙？ どちら、どこにいる？」

「ほら、その桶のそばにつくばっているよ。」

「ああ、青蛙だね。何で這入(はい)って来たのかねえ——こら！ 青蛙、なにしに来た？」

より江は怖いので、兄さんの後にくっついていました。青蛙はきよんとした眼玉をして、ひくひく胸をふくらませています。ぼんぼんぼん、店の時計が八時を打ちました。より江は時計をみあげて、お母さんはどこまで行ったのかしらと怒ってしまいました。より江は淋しいので、兄さんが大事にしているハモウニカを借して貰って、一人で出鱈目(でたらめ)に吹いて遊びました。小学校六年生の健ちゃんはときどき机から顔をあげて、

「よりちゃん、ハモウニカに唾(つば)を溜めちゃ厭(いや)だよ。」

といいました。より江はハモウニカを灯(ひ)に透かしてみました。沢山窓があるので、小さいより江は、すぐ汽車の事を考え出して、ハモウニカを算盤(そろばん)の上へ置いて「汽車ごっこ」とひとりで遊びました。より江が板の間の方までハモウニカの汽車を走らせていると、戸外で、

「今晚、今晚、今晚！」

という声がします。

兄さんの健ちゃんはびっくりした顔をして「誰かね。」と大きい声で返事をしました。すると、表の硝子戸を開けて、見たこともない一人の男のひとが這入って来て、

「腹が痛いのだが薬を売ってくれないかね。」といいました。

林芙美子 「蛙」 (1936)

II. THÈME

Florence

A quinze ans, - j'en avais seize -, elle m'attendait dans son petit jardin. J'arrivais à vélo, sa mère en face tirait le rideau. J'étais un bon parti.

A vingt ans, quand je passais, débauché, elle ne relevait plus la tête.

A trente, elle devint institutrice, dans un village perdu. En tournée par là, je vins la saluer. Pour rester. Nous ne sûmes pas comment le dire.

A soixante, elle est revenue dans son jardin. Toujours fine, quand je ralentis en voiture, elle pose son tricot et se penche un peu.

Georges L. Godeau, *Après tout*, éd. Le dé bleu, 1991.

Tournez la page S.V.P.